藤枝市史だより
第21号
平成21年11月30日発行
[編集・発行]藤枝市 文化課
文化財・市史編さん係
〒426-0014
藤枝市若王子500 郷土博物館2F
☎054-645-1184
E-mail
muse@city.fujieda.shizuoka.jp

「御当家小符類」について

戦場では敵味方が入り乱れるため、何の印もない状態では自分の配下や味方を見失いやすいうえ、同士討ちが起こりやすかったのです。そこで戦国時代以来、大名たちは味方を識別できるように統一した旗指物・合印・御貸具足などを家臣たちに使用させることで、この問題を解消しました。

今回紹介する「御当家小符類」は、田中藩本多家が敵味方を識別するため定めた旗指物・合印・御貸具足などの形を図示した史料です。同書は、田中藩学問所世話役などを歴任した熊澤惟興が文化十一（一八一四）年十一月に写したもので、現在藤枝市教育委員会で所蔵しています。

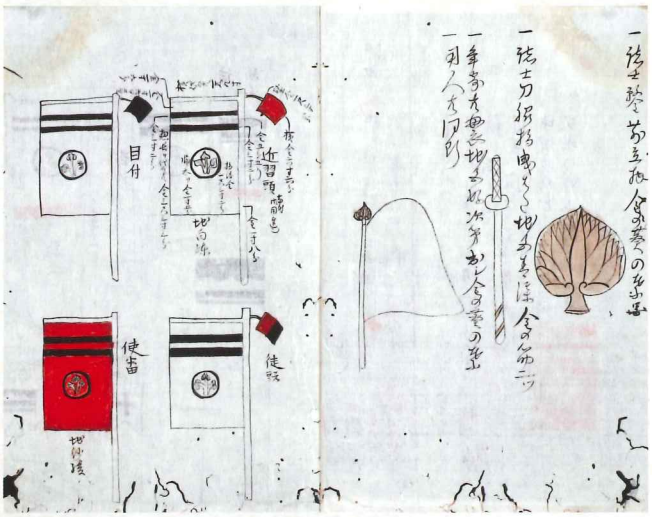
同史料には、まず最初に田中藩では諸士がかぶる兜の前立には立葵の葉を使うと書いてあります。現在もこの前立は、教育委員会所蔵の甲冑の兜に添えられる形で残っていて見ることができます。次に諸士の陣刀・脇差の鞘（刀を覆い保護するカバー）は、青漆塗りの曳肌に金の筋二本を置くとしており、田中藩は士分が持つ刀・脇差の姿まで統一しようとしていたことがうかがわれます。他藩では、刀剣類の姿まで統一しようとした例は少なく、珍しいものです。その後、年寄（家老）・用人以下が背負う旗指物の規定が続きます。年寄・用人が背負うのは葵の葉の飾りがついた母衣（流れ矢を防ぐ補助防具）で、番頭・物頭は葵の葉の飾りのついた指物、近習頭以下の士分は本多家の家紋である丸に立葵の紋を描いた指物を背負いました。また、年寄・用人・番頭は指揮具である采配を持つことになっており、その形や金具の材質なども細かく決められていました。

徒士以下は指物を使わず袖に合印を描いた布片である袖印を付けました。徒士・足軽の袖印の合印には立葵の葉を簡略化した文様、中間（武家奉公人）や陪臣（家臣達が召抱えた家来）たちの合印は十文字が使われました。また、同史料には足軽が付ける御貸具足に関する記述もあり、それによれば笠・胴ともに黒漆塗で、胴は図を見ると正面に草摺（上脚部を守る防具）一段のみを置く極めて簡単なものであったようです。

現在も多くの前立や御貸具足・指物などが各地に残されていますが、残念ながらそれらのほとんどはどこの家中の物であったのかさえ不明なものが多いのです。そのような中、このような史料が残り把握できる例は貴重であり、今後田中藩の遺物保存に生かして欲しい史料です。

（近世担当調査委員　長屋隆幸
／愛知県立大学非常勤講師）

現存する葵の葉の前立



熊澤文庫『御当家小符類』
（藤枝市教育委員会所蔵）
右：葵の葉の前立
左：役職ごとの旗指物の規定

藤枝市の仏像

平成十八～二十一年にかけて、藤枝市史編さん事業の一環として市内の仏像調査を行いました。藤枝は、かつては志太郡衙（ぐんが）があり古くから文化が栄え、仏教寺院も多くあります。この調査を行っている最中に静岡県下で仏像盗難事件が発生しました。さいわい犯人は逮捕されましたが、私が聞いた話で犯人は「仏像の所有者はとくに決まっているわけではないから」と言ったとか。とんでもない話です。確かに今回調査した中にも〇〇観音堂という名称で、地元の人たちが管理している仏像もかなりありました。こういう仏像は地元の人たちにとっては大切な信仰の対象ですし、文化財という観点から見れば国民の大切な遺産であり、歴史、文化、民俗を知る上でのかけがえの無い宝でもあります。

日本では神仏習合という考えから神社と仏教寺院は共存してきましたが、明治の神仏分離令がきっかけで、廃仏（はいぶつ）毀釈（きしゃく）運動が起こり、住職のいない無住の寺が増え、それでも仏像や寺宝は残ったものも多く、地元の人たちが管理しているわけですが、数日に一度しか見回りに行くことが出来ないのが現状です。盗まれた仏像は一度コレクターの手に渡ってしまうと、買戻しの交渉をしなければならなくなりますし、海外のコレクターだとさらに交渉は厄介なことになります。今回の調査は盗難を防止する目的で行ったわけではありませんが、仏像の調査記録が残っていたお陰で、盗まれた仏像が見つかった例があるそうです。文化財調査は文化財の実態を把握し、貴重な作例であれば文化財指定にし、修理を必要とする場合は指定を前提に修理を申請するためのものです。しかし、文化財調査の結果が盗難に遭った仏像を手配するために使われることがあるのは情けない限りです。

日本で最初の調査は明治十七年（一八八四）に岡倉天心とフェノロサが法隆寺で行い、成果がありました。今回の藤枝市の調査も時間をかけてじっくり行いましたので、かなりの成果がありました。詳細については割愛しますが、一番印象に残ったのは、鬼岩寺（きがんじ）の調査でした。この寺は藤枝市でもっとも由緒ある名刹の一つとして知られていて、平安時代の仏像が今でも残っています。本尊は平安時代後期の聖観音像（しょうかんのん）で、もう一つは不動堂の不動明王像（市指定文化財）です。この像はその作風があまりにすばらしいので、以前から知られており、かつて東京から仏像彫刻の専門家である故西川新次先生が調査に来られたほどです。残念ながら当時の調書記録はすでに散逸していましたが、今回の調査であらためてそのすばらしさを再確認しました。不動明王像は県下でもその優れた作例は多く、建穂寺（たきょうじ）（静岡市葵区）にも二体あり、一体は文化財指定を受けていましたが、もう一体は調査の結果新指定となったものです。鬼岩寺ではさらに成果がありました。境内の地蔵堂の本尊が鎌倉時代の作と判明したことです。この像は未指定ですが、詳細に調べた結果、鎌倉時代の本格的な寄木（よせぎ）造りの作と断定しました。その他の寺でも平安時代、鎌倉時代の作と判明した仏像も発見され、成果がありました。

鬼岩寺の木造不動明王坐像（中央）

（美術担当特別調査委員　大宮康男／静岡大学教育学部教授）

中藪田今昔ものがたり

あのヨシ原が清里団地に

昭和十七年（一九四二）、私が樺太から中藪田へ引き揚げて来た当時、中藪田は三〇戸でした。部落は長方形の地区の外側に点在して、中央部の約三〇町歩は田んぼとヨシ原でした。

地盤が悪く、もぐる田んぼとして有名なこの地へ宅地計画がされ、五光建設→星和地所→日本生命→大林組とオーナーが変わりましたが、昭和四十五年埋め立て開始、様々な工法がとられた結果、平成八年、清里団地が誕生、計画の六五〇戸に対し三〇〇戸近くが出来、あのヨシ原が立派な団地に様変わりしました。

「ソブッ田」のソブを草炭に

中藪田の田んぼは、通称「ソブッ田」と言われ、ヨシが生い茂って耕土の下はヨシの根が厚い層になって足がもぐり地盤の悪い田でした。

終戦直後、このソブを草炭にして売り出そうと、伊豆の東海自動車（株）がソブを掘り出して棒状に圧搾、天日乾燥させて「草炭」として燃料化を試みましたが売れずじまいでした。

盗まれた六地蔵尊の猿宮像

中藪田の中央部、通称「藪田富士」の麓に六地蔵尊があります。毎年八月二十四日が祭典で、昔は村の初盆の家で重箱一杯のだんごが供えられ、お参りに来る人にふるまわれました。

六地蔵の脇に小さな祠があり、庚申さんと猿宮像が祀られていましたが、数年前の仏像盗難事件が相次いだ頃、この猿宮像も盗難に遭い、今はもぬけのからです。

中藪田の六地蔵尊

中藪田にキツネが七匹

四十年前頃、中藪田に大きな養鶏場がありました。一時三千羽もいましたが毎夜キツネに襲われてニワトリが食い殺され、たまりかねた飼い主が「トラバサミ」（獣捕獲器）をかけたところ、たちまち七匹ものキツネが捕まりました。大きな檻を作って見世物に飼っていましたが、餌代もかさみ日本平動物園へ引き取ってもらったようです。

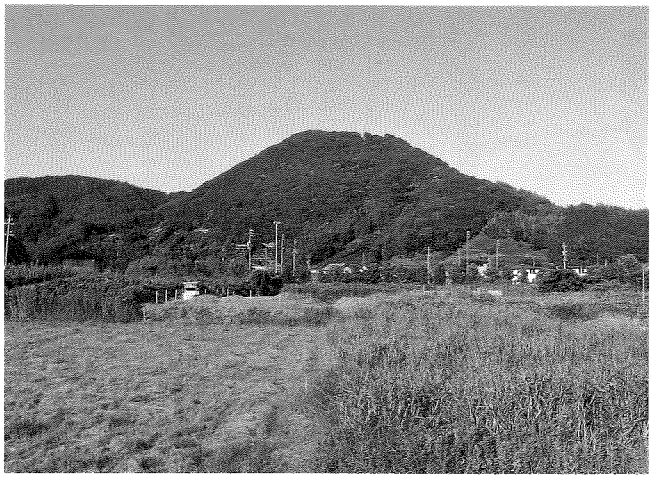
藪田富士は中藪田のシンボル

中藪田の東側に聳える潮山（二〇一メートル）は、その形が富士山に似ているところから地元では「藪田富士」と呼ばれ中藪田のシンボルになっています。頂上はＮＨＫのアンテナ中継所があり、眺望もよく登る人も増えているようです。

昭和の終わり頃、前助役の福井喜三郎さんの山から登ったところ、キツネにバッタリ、目が合ったら一目散に逃げていきました。

今でも中藪田にキツネはいるのだろうか？ タヌキはよく見かけますが…。

（市史編さん調査協力員〈葉梨地区〉上田東幸）



潮山（通称“藪田富士”）

明治四十三年瀬戸川水害の写真と慰霊碑について

藤枝市教育委員会は、明治四十三年（一九一〇）八月の瀬戸川水害を記録した貴重な写真を所蔵している。静岡県もまた『志太郡崩壊地実況写真帳』（磐田市立中央図書館所蔵）を作成して記録を残そうとした。志太自治会も水害から六〇年後の一九七一年に『せとがわ　明治四十三年瀬戸川水害の想い出と志太』を発刊した。来年はこの水害から一〇〇年と言う区切りの年でもあり、本年発刊の『藤枝市史研究』（第十号）にそれらの写真のうち二九枚と、「志太郡崩壊地之図」を歴史資料として紹介した。

写真は大きく二つに分類できる。一つは瀬戸川水系上流部山間地である瀬戸谷、稲葉、葉梨等の被害写真であり、他は瀬戸川勝草橋辺から破堤した志太・稲川地区を中心とした青島村の写真である。

写真①は「稲葉村宮原　瀬戸川上流千葉沢東側崩壊実景」と記録されており、地滑りによる山の大崩壊を思わせるものである。写真②は「志太稲川ノ人家倒壊シテ国道東海道ヲ閉塞シタル惨状」と注記のある写真である。

両地区には水害犠牲者の慰霊碑が建立されているので、併せて紹介する。写真③は稲川で奇跡的に水没を免れたと伝える葦中（あしなか）観音堂（かんのんどう）の慰霊碑である。碑面には「追弔碑（ついちょうひ）

写真①　稲葉村宮原　瀬戸川上流千葉沢東側崩壊実景
（『志太郡崩壊地 実況写真帳』より）

写真②　志太稲川ノ人家倒壊シテ国道東海道ヲ閉塞シタル惨状　（『せとがわ』より）

為明治四十三年八月瀬戸川決潰之際水難死亡者供養　于レ時（ときに）明治四十五年三月彼岸建」と彫られている。写真④は瀬戸川破堤箇所上に建立された志太地区の慰霊碑である。碑面には「南無妙法蓮華経」とある。

『藤枝市史研究』というと一見難しそうな印象を受けるが、市史は本来市民のための歴史である。従って他の水害写真について市民の皆さんが『藤枝市史研究』を手に取り、ご覧下さることをお願いしたい。

（近現代担当調査委員　清水実／
静岡県立藤枝東高校教諭）

写真③　稲川地区
葦中観音堂の慰霊碑

写真④　瀬戸川破堤箇所上に
建立された志太地区の慰霊碑